余は上に於いて略々西教授の東洋倫理を檢討紹介し得たと思ふ其の內容は右に於いて考察した如く、必ずしも我々を首肯せしめるものではないが、而も夫が終始一貫した信念を以て貫かれてゐる點に於いて、又東洋倫理が如何なる內容を有つたものであるかを綱要的に伺はしめる點に於いて一讀の價値ある著作と云ふことが出來るであらう。附錄「朱子學・仁齋學・徂徠學について」は、序言及び儒敎の傳來、支那宋學について、程朱學說の大要・仁齋の學・徂徠の學の五項に分れて居り、夫等は日本道德思想史の研究者に採つてよき參考となるであらう。是の如き東洋倫理の著作に接して感ずることは、西洋哲學專攻の士が、恒に東洋哲學への顧慮を怠らず、而して哲學者及び倫理學者の根本任務は、恒に一國の國民の精神生活の指導に在ることを自覺して頂き度いといふことである。

最後に恒に日本文化の發展の爲に盡瘁されつゝある岩波茂雄氏に對して敬意を表するものである。—三四・八・十—（中林荔太郎）

雜　錄

ディルタイと現代の獨逸哲學

ユーリウス・シュテンツェル

（一）

ディルタイの七十八年に亙る長い實り豐かな生涯に、思想上、彼が負ひ、彼に負ふところの者には、ヘルムホルツ、トライチュケ、シェーレル、ウーゼネル等、多方面の有力な學者がある。プロシアの名門出の政治家ヨルク・フオン・ワルテンブルク伯との友交は往復書簡集一册を殘し、ホフマンシュタールの如き詩人も人間として又學者としての彼に追悼文を書いてゐる。學派といふやうなものは建設しなかつたが、各方面に於て、彼の思想を、自立的に繼ぐ有力な弟子達がある。暫しの知人にも、終生忘れられない印象を、或る者にはその生涯に決定的な影響をさへ與へた。それにも拘らず、彼の影響はあまり廣汎でなく、又著書も大した外的成功を收めてゐない。それは、彼の思想の深遠なことにもよるだらうか、主として、かゝる外面的なことには全く拘れなかつたからである。四十歲の時、母宛に書いたやうに、科學と文化の危機によつて心を奪はれ、それに貢獻せんとする彼にとつては、個人の榮譽などは全く問題にならなかつたのである。だから、一九一一年歿した時には、彼の著作にはとつくに絕版になつてゐるものもあ

り、諸種の雜誌に散在して容易に入手し難いものもあり、又全く上梓されてゐないものさへあつた。たゞ「體驗と詩」に蒐められた文學論のみが、最もよい意味でポプュラーであつた。死後門下によつて編まれた全集の出版によつて、彼の生の豐かさが一般人にも味得出來るやうになつた。今日我々が彼の生誕百年を祝するのは、かういふ場合によくあるやうに、曾つて偉大であつたものに對する敬虔な回想ではなくして、その偉大さが今尙ほ生長しつゝあるものゝ承認である。ディルタイの哲學は、概念的に仕上げられたものではないが、現代の哲學は彼の中に、恰かも實が花の中に於てのやうに含まれてゐる。

ディルタイは、外面的には長い生の行程を歩んだ。バーゼル、キール、ブレスラウを經て、學生として又私講師として、決定的な學問的影響を受げたベルリンに歸つた。それにも拘らず、彼は完全な成就の幸福感に浸つたことはなく、常に未完成の暗影が彼につきまとつてゐた。一八五八年「人生の半を終へんとした」彼は「まだ端初のみだ、端初のみだ」と書かざるを得なかつた。又彼の著作も、常に「の試み」とか「への基礎」とか「への寄與」とか「に就いての草案」とかいふ謙遜の辭を冠してゐる。一八九五年賜暇を求めるに際して、彼の とりかゝつてゐる夥しい仕事の仕上げが年を經ると共に困難になることを語り、その成就のために深い靜安の日のあらんことを希つてゐる。七十歳の祝賀に答へて「目標は見える。自分が中途で挫折しても、若い同行者達が目標に到達するのを期待する」と結んでゐる。

かゝる思想家の著作には、愛を缺く批評家から見れば多くの難點があらう。種々の草案や試論に於ける際涯のないやり直しや手入れは、單純な歴史的又は體系的結果を求める讀者には堪へ難いものである。生と學問に於ける總ての精神的現實の了解のためには無條件の信頼を要する。そしてそれによつてのみ全體への眺望が開かれる。尙ほ暗示されたものを終極まで考へ通す追思索の力が必要である。そしてこれらの草案こそ、後代の思想家達の眼には、ディルタイの所謂生の意味に關しては完成した研究よりも一層多くのものを含むことがある。「具體的なものを、その前も後も隈なく追體驗することによつて、生の意味は歴史的に見られる」のである。私の講演もディルタイの生の意味を究め出さうとする一つの試みと見做されたい。

一八六一年、二十六歳のディルタイは二つの計畫を立てゝゐた。それは基督教的世界觀の歴史を書くこと。哲學的及び宗教的精神を、諸體系の生成を歴史的に包括することによつて批判的に研究することの二者であつた。かくの如き、我々の歴史的・哲學的世界觀に基く純粹理性の批判――それを充全に論究することの到底不可能なことは彼によつても意識されてゐたが、しかもディルタイは既に彼の一生の事業を豫見してゐたのである。

カルヰン派の牧師の家に生れ、自らも聖職に就くことになつてゐたディルタイは神學者として研究を始めた。併し、彼は、知らぬ間に歴史家になつたやうに見える。視界の擴大にも拘らず、彼の眼は常に、歴史に於て畏敬の念を禁じ得ないものに向けられて

ぬた。一つの時代の總ての個體を通じて支配する、何處にも認められながら、しかも容易に捕捉し得ない時代精神こそ、その背後にはもはや溯入し得ない窮極的な形而上學的所與である。かくして、彼は哲學の新しい對象を發見した。さて彼が、自己の屬する時代の精神として把捉したのは實在への强力な努力である。そこに於て、ディルタイは、實在意識と自己意識との內面的な變化が行はれてゐるのを看取した。そしてその解釋こそ彼にとつて哲學の課題であるやうに思はれたのである。この新しい實在意識は、十九世紀初頭以來、自然科學の側から歷史的研究の領域に侵入し始めた。歷史學的分科としての精神科學の誕生、ランケ、ニーブール、グリム兄弟、偉大な古典文獻學者達の事業はディルタイの哲學的實在概念を規定した。觀念論的世界觀は崩壞し、哲學の赫耀はエピゴーネンの時代に至つて消え去つた。觀念論哲學が不當にも自然科學に適用した抽象的な思辨的諸觀念は嚴密な自然科學によつて苦もなく克服された。今や、自然科學的な諸概念や考察法は實在研究の全領域に亙つて擴張され、今度は別の方面から、實在概念が傷けられる危險が看取された。思辨哲學は抽象的であつたが、實證主義的經驗論もそれに劣らない。經驗全體が、その完全な、傷けられない姿で、哲學的思索の基礎となつたことは未だ曾つてない。實在全體を、その完全なまゝに、哲學の基礎とするといふのがディルタイの根本の思想であつた。

ディルタイは、哲學によつて未だ全く捉へられなかつた實在の側面を歷史に於て見た。それは、かの歷史學の建設者達が課題として捉へ、未曾有の確實な史料の研究によつて遂行したところのものである。ニーブールが、古代羅馬を包む霞を破つてその赤裸々な姿を露呈したことは、その一例に過ぎないが、ディルタイ自らが屢々語つてゐるやうに、彼にとつて一種の原本的な體驗であつた。ディルタイは歷史家として自信してゐた。哲學者には二種ある。數學的・物理學的科學の進步にも關與し得るものと、歷史學的・政治學的科學のそれにも關與し得るものとである。七十歲の祝賀に答へる辭の最初の草案に書いたやうに、「藝術哲學、宗敎哲學、法律哲學、國家哲學といふ風に、個々分離して存在する時代は終つた。諸基礎の單一な根元が求められ、諸科學が相互に連絡し、諸方法が闡明され、進展される何處に於ても、哲學的精神は現存する」のである。

ディルタイは若くして、「確實な資料による歷史的研究の仕事に當つた。先づシュライエルマッヘル書簡集の編纂を委ねられた。彼は一つの豐かな生の內奧を眺め、その時間的發展を一層完全に捉へることが出來た。だが、それに止らずこれを資料に忠實に叙述しようと企てた。その草案は益々大部になるばかりで、遂に未完に終る著作の最初の悲劇となる運命をもつてゐた。又、同樣な仕事を、後にも屢々負はされた。アカデミー版カント全集にも參畫し、未刊の遺稿の整理に努めたが、それはパウル・メンツェルによつて續けられた。彼は又、ヘーゲルの靑年期の神學的著作の公刊に着手し、門下のヘルマン・ノールによる出版への道を拓いた。かくの如く蒐集と資料研究の辛苦を嘗めた彼は、最も廣義に於ける文學

を收めるアルヒーフの建設を提議してゐる。政治文書館を羨望し、手稿の湮滅せんことを憂へて、精神科學の研究にも、かゝるものゝ與へられんことを希つたのである。

（二）

ディルタイは、顯著な個性、宗教的、哲學的な人格の研究から、完全な實在の究明に向つて進んだ。ディルタイの「飽くことなき實在への努力」は、先づ偉大な宗教的、哲學的人格の生成に向けられた。かゝる對象の研究は強ち偶然的であるとはいへない。彼自身早くから、一生の多岐な課題を豫見し、又彼にとつては、少壯時に仄かに見たものは、多くの點に於て、外的な、偶然的な原因に規定された老年期の斷片的な述作よりも、多くの眞理を含んでゐるやうに思はれたのである。この自己經驗から、彼の本來的な關心は、大思想家の端初に、人格がそれを規定する諸力に對して柔軟である少壯期の歷史に懸つてゐた。かゝる關心がディルタイの歷史及び歷史性に就いての見解を規定したのである。既に早くに、生長し、花咲き、死滅する種子に於て、それによつて總ての精神的生活體が、總ての自然的存在と同樣に理解される必然的なシェーマーを見た。併し、第二のシェーマーとして、我々を取り圍む無限なる生の空間、總ての生命あるものを養育し、形成する光を考へた。この二つのシェーマーは比喩であり、ディルタイの學問的な研究によつてのみ、その哲學的解釋は可能である。彼の學問的研究は、個人の個體的な形態よりも、時代精神の一般的特徵に向けられてゐる。それを、歷史的に有力な個體も回避せず、却つて特に顯著に表すのである。ディルタイによつて發見された、總ての精神的存在の歷史性は次の如く構成される。各時代は一つの普遍的な、確定した、特性を有する、そしてその表現として、その時代の偉大な個體は、種々異れる生の領域に於て、並立してゐる。彼等自身がその時代の刻印を捺されてゐるやうに、彼等は又、種々異る客觀的諸實在に、宗教、哲學、文學、音樂、法律、經濟等に彼等の刻印を捺す。そこに根據を有する人格の力によつて彼等はその時代にはたらき返し、時代精神のアトヴォカートとして歷史の諸命令を遂行し、未來の諸可能性を實現し得るのである。人間が歷史をつくるのであるか、或は總ての個體を超越する高次の力が存在して、時代を轉向し、諸觀念の盛衰を司るのであるか、これら二つの考は、その何れにも眞理が含まれてゐるのであつて、ディルタイにとつては、互に排除し合ふものではなかつた。果敢な意欲としての、又或る時代の精神並にその時代に包含された未來への犧牲的獻身としての歷史は、如何にして可能であるか、又如何にして了解されるか、これがディルタイにとつて本來的な問題であつた。

カントは三つの批判に於て學問、道德、藝術の「可能性」を問うたが、それに從へば、ディルタイの「歷史的理性の批判」は歷史の可能性を問ふものとして添加される。さて、ディルタイのカントに對する關係は積極消極の兩面を有する。先づ、カントの思想中ディルタイによつて取り上げられ、進展されたものをあげよう。（一）總ての認識は活動的なものである。實在は決して出來上つたもの

として與へられるのではなくして、常に活動的に維持し、形成されなければならない。(二)周知の如く、カントはその晩年、彼の哲學の根本問題を總て、「人間とは何か」といふ一つの問題に總括した。ディルタイによれば、その解答はたゞ歴史によつてのみ與へられる。又逆に、我々が精神的運動の經過を測る單位はたゞ人間にのみ求められるべきである。(三)ディルタイもカントと同じく、合理論的形而上學と戰つた。(四)それとは異つた形而上學、自己をこの世界の諸限界に於ける有限的存在者として知る人間の形而上學を樹立せんとした點に於て、兩者は一致してゐる。

さて、この四點は同時に又、現代哲學の關心がカントに向けられてゐるところである。次に、何處に於てディルタイはカントに對立してゐるかを見よう。ところが、上述のカントの思想の何れか一つを變容すれば、全部が變容することゝなる。先づ第一に、カントが經驗を把捉し、形成する諸範疇を擔ふ主體として考へた普遍的な純粹意識はディルタイにとつては單なる抽象物に過ぎない。彼にとつては、感情や想像や努力等總ての精神力を有する具體的な人間以外には、如何なる主體も、自我も、意識も存在しない。彼が捉へられたと感じ、そして哲學者として解釋せんとした一變せる實在意識は既に此處に於て體系的原理の地位を占める。從つて彼の思索の出發點となる對象も直ちに決定される。歴史的な思惟の主體として客體として問題になり得るのは常に具體的な自我である。カントの哲學的思索は、人間を問題とするときも、依然數學的・物理學的思惟の方向にあつた。「判斷力批判」以來、自我概念人間概念を進展させたが、その歴史哲學に於ては、全然、合理論的な進歩の觀念を脱してはゐなかつた。歴史的理性の批判を掲げるディルタイは、勢、カントと對立せざるを得なかつた。それに於て彼はカントの方法を實證しようと欲したが、併し諸範疇は歴史的對象といふ新しい存在の種類に適應しなければならない。カントは自然科學的對象とそれを認識する意識との間を、形式的なアー・プリオーリによつて橋渡した。併し、歴史的對象に於ては、認識する主觀と認識される對象との同一性といふことは、パラドクス的な問題である。認識する主觀はその對象を了解せんがためには、自己を歴史的對象として認識しなければならない。他方その認識の對象も亦同時に一つの歴史的な主觀である。かゝる行爲と受動的經驗との中間に存する歴史的存在に對しては、形式的なアー・プリオーリな範疇は凡そ無意味である。歴史的對象を迎へ、それを了解の過程に於て開示するものは、歴史的な生の過程の完全な豐かさから、内容的にも規定されてゐなければならない。歴史的對象は變化する、それを見る者の大小に應じて大ともなれば小ともなる。その死滅後も甦生する。このことは、歴史的な偉大さを見る眼を有する何人も、活動的な生を營む人間として見るにしても、或は歴史家、精神科學者として他人に傳へようとするにしても、掩ひ得ない事實である。

(三)

カントの純粹意識も、ヘーゲルの客觀精神も、ディルタイによれば、カント自らが克服せんとした合理論的形而上學の殘滓である。

彼は「精神科學序論」の第二部に於て、甚だ興味のある哲學史を書いてゐるが、それを貫く根本の思想はかうである。實體的形相、不變的超越的本質、絶對的理念を想定する形而上學は解消した。國家自體、人間自體、法自體等々の理念は、それが顯現する歴史的な諸現象と共に變易する。それらは、ディルタイが總ての生活體に對して樹てたかのシェーマーに從ひ、花咲き、實結び、枯死する。精神的なものも我々には決して物自體としては與へられず、現象として與へられる。成程、個々の時代の法律、美感、宗教的態度に卽して一般的特徴を抽象することは出來る。併し、ディルタイの眼は實在的な具體的なものに向けられてゐたから一回的なものの了解し得られる實存こそ、彼の主要問題であつた。變易する內在的な眞理、もはや論證されず、しかも總ての現象に附屬し、そしてそれらに、歴史的なものの聯關に於て、大なり小なりの意味を賦與する眞理の實在性に對する感情が今や新しい形而上學の問題となり、そしてディルタイによつて後代に殘された。形而上學的論證は破壞した。殘るは形而上學的氣分、あの太古から存する人間の本源的な感情である。かゝる感情は論證によつて解消されるわけには行かない。形而上學は沈默する。併し星辰から、夜の靜けさを通して、かのピュタゴラス派の人達が語つた天體のハルモニアが今も尙ほ聞えて來る。それは消し難い形而上學的氣分であり、總ての論證の根柢に存し、その死滅後も殘存する。この形而上學的氣分に於て人間は全體として與へられてゐる。カントに於ても亦感情は哲學的人間學のオルガーンとして、美感として、實踐理性に於ける畏敬の感情として、崇高美の感情として現れてゐる。

以上、カントからディルタイへの進展を三つの點に就いて、卽ち、活動性と自由の概念が歴史的なものゝ地盤に於て展開し始め、それによつて人間學的轉向が完成し、それと密接な關係に於て、古い形而上學的對象性から、內部に向けられた感情への轉向が行はれるのを考察した。實體的永遠的形相への眼が閉ぢると共に、形而上學的自覺は自己の存在に含まれた實體性に向ふ。形而上學はこの實體性を感情に於て體驗するが故に、かゝる形而上學は現存在の外には對象を有せず、限界の形而上學となる。かくしてカントの理念概念の本質的なモティーフは新しき生命を得る。それと共に、人間の有限性といふカントの第四のモティーフは、他の三者との聯關に於て明かになつた。このことは近代の、一部分は明かにディルタイに依據する實存の哲學に於て、不安、關心、氣分性の形而上學的感情と結合して、現れてゐる。

實存の哲學に赴く前に、ディルタイと現代の實存の哲學との中間に立つ哲學的研究を考察しよう。それらも亦ディルタイの思索と探究に、テーマの上で、結合してゐるのが見られる。ディルタイのテーマは當初から「自然科學的概念構成の諸限界」を示すことにあつた。併し、それはリッケルトの同じ名を冠する著書とは全く別のものである。この兩思想家は、方法上全く極的な反對をなしてゐるが、兩者を對立させて、價値、發展、個體等個々の理論に就いて、相互に補はせることは興味がある。兩者の相違は、心理學に對する態度に於て、特に顯著にあらはれる。リッケルトは心理學の概念

を狹隘し、その哲學的問題への干與を拒否する。これに反して、ディルタイは歴史的なる人格の全體を統一として把握し、このために心理學の概念を擴張せんとした。それは認識し意味を賦與する心の諸機能をも一緒に含むものであり、かくして心は時間的・歴史的な現存在を搾ふに耐へるものとなる。ディルタイは思惟心理學、構造心理學の概念を確立しようとした。それは彼の門下によつてあらゆる方面に亙つて進展されてゐる。個體的な人格の身體性を以て心の本質的特徴となし、身體全體を心の本質的な表現手段と見て、身心問題に新しい轉向を與へる人々も、同じ方向に動くものである。そしてこれら總ては、ディルタイの根本的なテーマである了解と表現の仕上げと見做すことが出來る。

現象學も同じ問題の圏内を動いてゐる。ディルタイの心理學的な諸意向と現象學との事態的な關係は顯著である。このことは、最近ミッシュによつてその著「生の哲學と現象學」に發表されたフッセルと老ディルタイとの往復書簡(一九一一年)が證明してゐる。それによれば、現象學は、その主要部分に關しては、ディルタイが繰返し要求するところのもの、即ち内的な生命への復歸、内面的な動機づけの追體驗に於てはじめて現實的に了解される生の諸形式への復歸である。ディルタイが唱へ、それによつて形而上學の不可能なことを證明する精神科學的分析は、フッセルの現象學的分析と、尤も後者は或る方法論的見地から制限されてはゐるが、相寛ふものである。兩者が、異る方面から異る歴史的動機によつて規定されて、異る發展を經て追求するものは、一致し合體するのである。勿論フッセルの全努力は、論理的研究に、形而上學的な本質論、意味論の方に向つてゐる。その立場からは、ディルタイの眞理概念は、「嚴密科學としての哲學」に於てのやうに、歴史主義として見られねばならなかつた。フッセルの「イデーン」特に英譯本の序言に於ては、體驗の流の概念を歴史の流にまで擴張せんとする萌芽が認められるが、最近の著作に於ては又以前の數學的・論理的な現象學の原始領域に後退してゐるやうに見える。そしてそれが、現象學の内部に於ける、ディルタイの諸問題を力強く取上げて「自己を所有する存在」をテーマとする實存的存在論的傾向と對立するのも決して偶然ではない。

ハイデッゲルの哲學に於て現れるディルタイと現象學との共通性には驚く可きものがある。彼は、ディルタイが終始示し續けた歴史性の現象に、現象學的分析を強烈に向ける。時間に於ける歴史の内容的擴布には向はず、人間の意識を、いはゞ一點に於て、即ちその都度消滅的な、未來に向けられた現在に於て捉へ、この現在の意識を、その全内容に亙つて分析する。それは消滅性に對する恐怖、將來するものに對する關心、我々が曳摺り歩く數千年の負課をも含むものである。ハイデッゲルは人間、生命などといふ表現を喪しみ、又意識といふ語を避ける。現存在、即ち自己・自身・實存する・を知る・存在が彼のテーマである。併し、ディルタイに於ける個々の問題は、總て新しい形態をとつて、ハイデッゲルの哲學にあらはれてゐる。では、ハイデッゲルに於ける新しいものとは何か。それは、上述の如く「瞬間」を取上げ、その充實せる意味を見

出した點にある。體驗された現在の瞬間に於て、行爲、卽ち時間繼起とその聯關への侵入が起る。過去には自由はなく、未來は可能的である。今の瞬間に於て、未だ可能的なものによつて規定されてゐる總てのものが決定し、そして現實的になる。今の瞬間に一切と無とが存するのである。

瞬間に於ては、總てが未だ可能的である。これを文字通りに解するときは、自由概念の不當な踰越を來すであらう。それは恣意であつて、自由ではない。總ての意欲は過去によつて制限され、過去はその結果に於て、現在と未來とにはたらきを及す。充實せる過去、卽ち歷史の意味が受容され進展されることによつてはじめて、意欲と行爲とが、存立せる世界への由る所あるはたらきかけとして實現される。ハイデッゲルは自由を「世界を支配・作ること」と定義してゐるが、これは現存在の、時間的世界の歷史性が表現され、能動性と自由とが內在的世界意味の了解的把握に轉入され得る最も普遍的な形式である。ディルタイも亦、歷史的なものゝ受容には、了解の能動的な諸機關を要することを、この能動的開示性に於て、精神的世界が自由に處分し得る所有物として建設されることを力說してゐる。併しハイデッゲルはそれを進めて、自由の行爲に於て起る、總ての歷史的なものゝ能動的變容にまで進展させ、しかも能動的な人間の形而上學的自由を、永遠に存在する諸理念の世界への眺望によつて狹限しない。かくの如く、實體的形相の形而上學を總て拒否する點に於て、ハイデッゲルはディルタイと一致する。かゝる歷史的なものゝ變容は、世界經過の內在的諸法則によつて導かれてゐる。こゝに、それが超越するものによつて既に氣分づけられ、支配されてゐるといふ「內在的超越」のパラドクス的な概念の根基がある。かゝる超越は世界企畫として、世界に內在する意味への眺望を開く。能動的な人間は、總ての存在の時間性の、その消滅と再生との、「死して成れ」の、自知的施行者である。それ故、能動的な人間の前に於ては、一切と無とが可能的なものとして存するといふ公式は制限されて、能動的な人間は、無を存在と行爲への移行として考へなければならぬといふ第二の公式とならなければならない。人間は、自己と世界を失ふ不安を知る。少くとも死に於て兩者を、彼の有限な存在の形式に於て失ふのである。併し、かゝる思想は人間を强力に生にまで押し返し、彼に行爲を敎へる。人間は、時間に於てある限り、可能的なものに對する關心を有する。不安と關心、それらによつて氣分づけられてゐること、消滅性の氣味惡き力の中に置かれてゐるといふ感情、ハイデッゲルの所謂「被投存在」の感情は常に、人間精神に形而上學的感情として存するのである。

（四）

ハイデッゲルの實存の哲學のこれらの特徵は、ディルタイの歷史的理性の批判の草案に含まれた歷史哲學を、前揭のカントの四つの思想の中最後のものから見直すとき、一層明かにするであらう。そのカントの思想とは新しい、人間の有限性の基礎に建設されるべき形而上學、「內在的超越」の思想である。ディルタイが一步を進

めたことは、歴史的空間と歴史的時間の發見である。時間概念は、空虛な時間形　から、時間的事象を支配する特有の諸力を有するものとなつた。我々は皆、兩親か我々の情感や思惟から分つ精神的間隔を知つてゐる。又如何なる限界に於て、我々の子供が我々を了解し、我々の情感や思惟を分有するかを經驗することが出來る。かゝる最も内面的な了解の根據の自然的變易は、歴史的に充實された時間性を、體驗に於ける一つの實在的な力として示す。この力は、各の世代に、自立的な自己感情を與へる。各の世代は前代に對して獨自の眞理を所有すると信じ、それ故に、その行爲に於て、評價に於て、前時代に對して自由であると考へる。

カントは人間の形而上學的實在を、人間がその當爲と意欲に於て自然の合法則性から自由であることに基礎づけた。自由の自然の合法則性へのはたらきかけは たゞ實踐理性の要請によつてのみ保證された。ディルタイは歴史家として、因果性によつて組織され歴史のテクストを、かゝる自由の干渉によつて、中斷することを斷念したが、歴史の經過全體を、人間がその意志によつて施行する一つの統一的な意味聯關として把握した。人間はこの聯關の了解に向つて努力すればする程益々自由である。個人は、彼の現在と未來に向けられた存在の意味か、彼と彼の孤立せる生を超越し、それを擔ふ歴史的諸力、民族、國民、時代の全體生活から受けとる。それと同時に、個人は、了解に於て、自己をこれらの歴史的諸力に組入する。ディルタイは、その覺知に於て人格を時間に於ける實在として實現する自己の生の了解と、他人の生の追體驗とを區別する。第一の了解は自敍傳に於て頂點に達し、第二の了解は記述的・分析的心理學と總ての精神科學に於て、その理論的表明を見出す。併し、現存在に於ては、この二つの了解は結合してゐる。自己省察と他人の心的生活の了解とが共にはたらくことによつてのみ、人格は精神的意識性の把持者として樹立される。そしてこの全心的作用を含む、自己の同類との異同辨別に於て自己の生を知る了解は、單なる理知の領域を越えるものである。ディルタイは主知主義の克服に志し、叡智の概念を擴張した。叡智は個體に於ける發展ではなく、又それからは理解されない。人類に於ける發展の過程であり、この人類こそ、認識の意志の存する主體である。しかも、叡智は、意志的、感情的側面をも含む、人間性の全體に於てのみ實存する。それに對應して、抽象の歴史的過程によつてのみ、抽象的思惟、認識、知識は成立する。最後に、この完全な、現實的な叡智は、それ自らの中に、宗教、形而上學、絶對者を、その實在の一面として有する。

（五）

ディルタイはかくの如き思想をもつて、彼の時代に先驅し、哲學の現代並に將來の問題に觸れる。彼の哲學は合理論的形而上學を斷念し、經驗的所與の諸要求を調和せんと努める現代の哲學によつて、少くとも消極的方面に於て、裏書されてゐる。既述のフッセルの現象學はいふまでもなく、リッケルトの反プラトーン的形而上學、ハルトマンの問題學等、總てこの傾向にあるものといへるだらう。その積極的方面に關していへば、形而上學的なもの、理

論的合理論的把捉から情感的・人格的把捉への移行といふディルタイの根本思想は、少くとも哲學的思索のシュティールに於て實證されてゐる。ハイデッゲル、ヤスペルス等の、事態に向ふ諸體系に於ては、その內的源泉として、人格があらはれてゐる。人間全體の調和を志し、ディルタイの如く、形而上學的諸假定に關しては、極めて自由にカントの批判哲學に依據し、或はカント哲學の根本的主張と一致しつゝ、しかもその演繹は斷念する。彼等は讀者も等しき氣分を有することを要望し、それをプラトーンのペイトにも比すべき技術を以て追求する。かくの如き、詩的解釋を哲學的解釋と並列せしめる哲學的思索のシュティールの變化は、ディルタイが明瞭に示したところのものである。

ディルタイにとつては、詩人も、哲學に於て表れると同一の諸力の擴聲器である。一つの生の理想、一つの世界觀を有する程の詩人には一つの哲學がある。そこには生のその全體的聯關に於ける自覺がある。バーゼル大學就任演說(一八六七年)に於て、レッシング以來の文學運動を、同時代の哲學的運動に比して、第一次的なものと見做してゐる。これらの諸時代の運動は一つの新しい哲學同樣のはたらきをなした。詩人達は新しい哲學を直觀的に敍述することから、その學問的基礎づけに向つた。シェリング、ヘーゲル、シュライエルマッヘルの諸體系は、このレッシング、シルレル、ゲーテによつて形成された人生觀、世界觀を、論理的・形而上學的に基礎づけ徹底したものに他ならない。強い永續的な影響を及したのは世界觀であつてその基礎づけではない。

ディルタイの獨自のシュティールは、かゝる生の豐富な事實を追創造的に敍述することに向けられてゐる。歷史に於てはたらく諸力、個人であれ、觀念であれ、それを僅かな筆でその豐かさを壓縮して、描く彼の技術は特に印象深いものである。

ライプニッ時代の敍述に於て、その時代の文化諸現象のコーラスを聞くことが出來る。かゝる共觀的歷史考察には、一つの敍述術が必要である。そしてそれは、かのシルレルやフンボルトが說いた、史的形成と詩的形成の關係といふ古いテーゼを實證するものである。

この方向に哲學を擴張することは、極めて緊急であるが、併し一つの大きな冒險である。それは正しい豐富化であつて、都合のいゝ近路であつてはならない。この哲學と詩の結合は、美辭麗句を連れることによつて高尙な世界觀を自負するディレタンティスムから起るのであつてはならない。ディルタイは非合理的なものへの侵入を、たゞ理知の道が窮り、その限界に達したときにのみ、許した。哲學者に於てはたらくものは、生と現實との聯關と根基とを究め盡す論理的エネルギーである。その成果が如何に懷疑的なものであらうとも、事物の根柢にまで肉迫する論理的エネルギーによつてのみ哲學者は存在するのである。

史眼に映じたものを詩的に表現することは、決して個々の歷史的研究に代り得るものではない。哲學者はたゞ歷史記述に就いて語り、書くことを欲するのみではなく、自ら歷史を書き、示さなければならない。そして、時代精神の、それによつてでなければ

把握し得ない歴史的諸所與を對象とするのであるから、シェティールを有する、情感的・活動的關與を要求するやうな形成があらはれる。ディルタイのかゝる力は「體驗と詩」や「獨逸詩と音樂」に於て最もよく見られるが、この藝術家的形成の哲學的意義は、體系的考察の最中に、彫塑的な實例を引くことによつて、總ての概念分析を、綜括的に具象化せんとする際に、最も明瞭に看取される。「歴史的理性の批判の草案」に於ける ルッターとその時代の考察はその一例である。（全集第七卷二一五頁參照）。

（六）

ディルタイは、あらゆる對象的に敍述される、無時間的な、永遠の諸理念を斷乎と斥け、觀念的普遍者の代りに、自力によつて時の流から浮び上る意義あるものを置いた。如何なるものが有意義なものであるか。その判定の標準は絶對的な本質に求められるのではなくして、歴史そのものから、歴史の力からとられるのである。時間的なものゝ流れから浮び上り、常にその姿を示すもの、その意義と偉大さは後の諸世代に於て、はたらき、常に現實的である。宗教的なものゝ理念の如何に精細な分析よりも、宗教的偉人、宗教的天才の方が、宗教が何であるかを一層明かに示す。彼に向けられた了解は、あらゆる分析と本質把捉を指導し、彼への私淑を喚起し、自己の存在の缺陷を補はしめ、「障壁の門を外づさせる。」偉人はその死後も、人格として理想として――抽象的の觀念としてではなく――存するが故に、その喚起する畏敬と愛とは、ひとを行に推し進め呼び出し、義務を負はせる。以前の形而上學が演繹せんとした觀念的內容、それは歴史的なものそのものゝ實體に於て、はたらきとして、人格の形に於てその豊かさを少しも失ふことなく、經驗されるのである。

ディルタイは、「獨逸文學と音樂」がその總括をなしてゐる諸著作に於て、獨逸民族に高貴なる祖先の諸像を示さんとし、獨逸國民性を、その總ての可能性に亙つて提示しようとした。これらは總て、彼の教育學の講義の一部であり、それは、ディルタイにとつては、常に國家教育學乃至は國民教育學であつた。ゲルマン的なもの、本質的特徴の一つとして、力の無制限的發露こそ人間存在の最高の價値と享受を與へるものであるといふ信仰を考へた。この獨逸的なもの、無制限性は、第二の特徴として、他の諸民族、諸國民を顧みて、自己の缺陷を補はんとする寛容を生じる。このディルタイの著作に於て、恐らくはじめて、獨逸精神の全體史に組入れられたシュツ、バッハ、ヘンデル、ハイドン、モツァールト等の音樂家は、異國の精神的財に對する極度の開放性としかもそれからより高い自己を形成せんとする力とを示すものである。

ディルタイは、カントやヘーゲルとは異つて、我々獨逸人にのみ屬するといふ意味に於ても、典型的なる獨逸哲學者である。他國人が、自己の哲學の問題のために、彼から學ぶことは一層困難であらう。何故なら、彼の哲學的思索には、彼が詩人的なものゝ本質と考へ、哲學をその普通の概念の彼方にまで擴張させたかの捕捉難い籠言者的、改革者的なものが、又彼が獨逸的なものゝ本質的特徴と考へたかの無制限性の或るものが、有力にはたらいて

ゐるから。この無制限性に對する對抗力は獨逸哲學の古典的傳統によつて保證されてゐる。我々が考察したやうに、概念的に一層嚴密な他の諸哲學から見直すことによつて、ディルタイの哲學的思索に於ける概念的なもの、諸特徴も明かにされるのである。協同社會の形而上學的意味を解釋し、哲學を「我」にではなくして、「我々」に基礎づけようとする獨逸哲學の最高の課題に關して、ディルタイから敎へられるところのものは大である。我々はハイデッゲルの哲學から「ひと」の危險を學んだ。自我概念の變化はディルタイの最大の關心事であつた。彼は、國民の概念を、歷史的文化の協同社會として、最も現在的な行の協同社會として考へた。「協同感は或る特定の諸體驗に於てのみ存する。一つの國民に於て、總ての種類の共通的諸體驗は、國民的協同體に意識的に關係してゐる。かゝる協同體は、それに屬する諸個體の生の總ての方面に關係してゐる。この協同體に屬するといふ意識は、この國民的結合に屬する諸目的を考へさせる。各個人は、自己の目的を追求しながら、特定の目的を定て、その領域に於ては、あたかも一主體のやうに行動する。國民的結合が彼等に課する目的を協同結合の意識に於て實現する。その全體にとつてそのとき最高善であるもの、意識が成立する。それはルッテルの時代のやうに一つの全體的氣分によつて起ることもあり、或はビスマルクの時代のやうに一偉人の指導の下に行はれることもある。總ての外的事象、運命、行爲は、その國民の生に於てそのとき最も內的なものである目的によつて評價される。個人の諸計畫、諸目的は常に、國民の內面性に對して時間的、相對的關係を有するのみである。國民は無制限の諸可能性を有する。」

（一九三三年十二月六日、ベルリン大學に於けるカント協會地方部會の記念講演、カント協會講演集第三十三册から。）